

可憐スル萬ガ一ニモ自然ラ此ル事有也トナム語リ傳ヘタルトヤ

〔大和物語〕上あさたゞの中將、人のめにでありける人に、しのびてあひわたりけるを、女も思ひかばしてすみけるほどに、かのおとこ人の國のかみになりて、くだりければ、これもかれもいとあはれとおもひけり、さてよみてつかはしける、

たぐへやる我玉しるをいかにしてはかなきそらにもてはなるらん、となんくだりける日いひやりける、

〔大鏡〕清範律師、犬のために法事しける人の講師に、しやうせられていくを、清昭律師略中聽聞しければ、たゞ今や過去聖靈は、蓮臺のうへにて、ほとほえ給ふらんと、の給ひけるを、さればこそこと人はかく思ひよりなましや、なをかやうのたましゐある事は、すぐれたるみはらぞかしとこそほめ給ひけれ、

〔台記〕康治三年元天養五月廿六日丙子、是夜有人魂、自良向坤、其體太長云々、

〔拾芥抄〕上本見人魂時歌

玉ハミツ主ハタレトモシラ子ドモ結留メツシタガエノツマ
誦此歌結所著衣妻云々男ハ左ノシタガエノツマ、女ハ同右ノツマヲ結云々、

〔太平記〕二十一先帝崩御事

主上後醍醐苦ゲナル御息ヲ吐セ給テ略中玉骨ハ縦南山ノ苔ニ埋ルトモ、魂魄ハ常ニ北闕ノ天ヲ望ント思フ略中ト、委細ニ綸言ヲ殘サレテ略下

〔類聚名義抄〕生イカ

〔伊呂波字類抄〕伊事生イケリ、活不死、穀蘇、存居、蘇已上生也

〔源氏物語乙女〕十一うれしうこの君をえて、いける限のかしづきものと思ひて、明暮につけて、老の